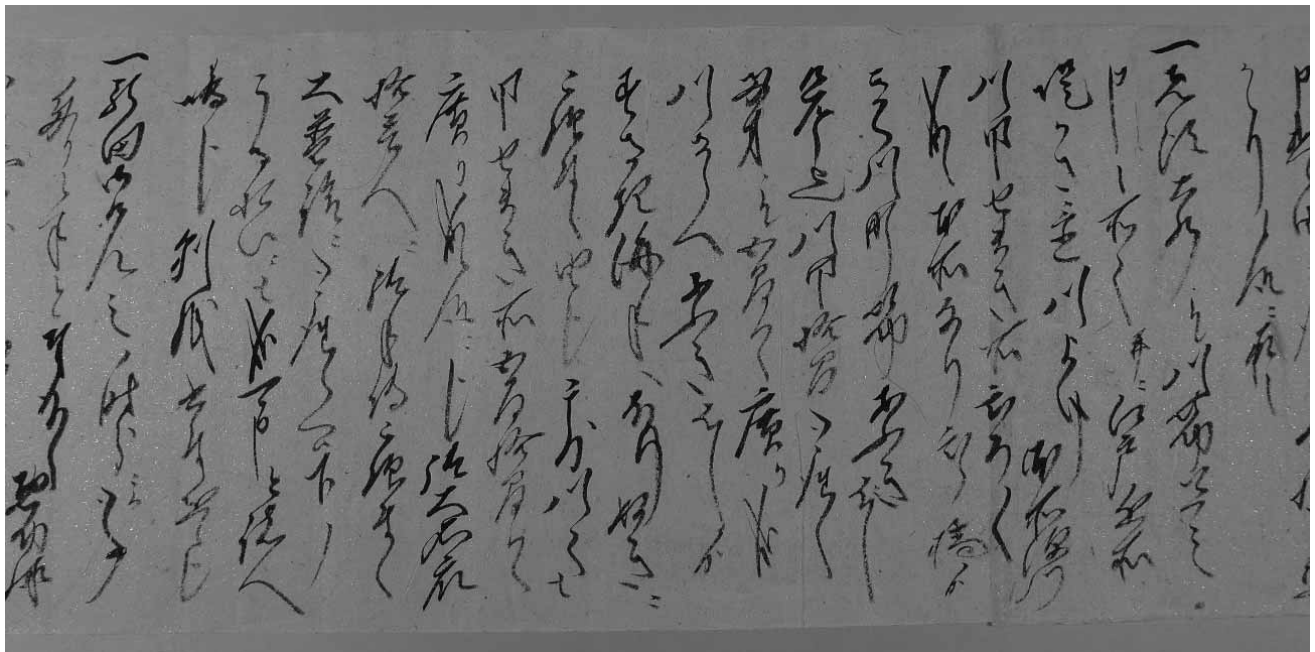


# 江戸の洪水対策



10月9日神戸文左衛門あて堤文助書状

国文学研究資料館は歴史資料を約五〇万点所蔵し、それをアーカイブズ学の理論に基づいて科学的に利用することができるように検索手段を作成して公開している。今回は、尾張国名古屋元材木町神戸家文書のなから江戸の水害に関する古文書を紹介する。神戸家は江戸の中心部にも地所を持ち、そこで貸家・貸倉庫経営を行っていたため、その不動産経営担当者から書状がさかんに神戸家に出された。そのなかには、寛保二年（一七四二）の大水害（死者一・三千人）後の状況を伝える書状がある。その一部の写真を出した（神戸家文書 請求記号ZAP-538-1-1、十月九日、神戸文左衛門あて堤文助書状）。

一、先頃大水にて川筋いたミ（痛み）申候所々、并ニ江戸近所堤かさ置川よけ、本所深川川中せまき所ひろく被成候、本所なりひら（業平）橋よりきく川町筋あふきばし（扇橋）是迄川中拾間御座候、両方ニ而五間つつ広ク被成川さらへ（浚え）、あふきはし（扇橋）よりすさき（洲崎）海手へほりぬきニ被仰付候由申候、其外川々も巾せまき所五間拾間つゝ、広ク被成候様ニ申候、御大名衆拾老人ニ御手伝被仰付候、大普請ニ御座候へハ下ノうのおひ（潤い）ニも成可申と諸人噂申候、別紙書付遣申候

このように、洪水のために隅田川などが氾濫したので、それを今後軽減するために本所・深川の水路の拡幅工事が行うように命ぜられたことを伝えている。具体的には、本所の横川の業平橋から扇橋までは両側五間ずつ広げ、扇橋から洲崎海岸までは掘り抜くこと、またその他の水路の拡幅が指示されている。現代的表現をとれば、将来の洪水に備える減災対策である。これは一人の大名に命ぜられ、大規模な工事になるので庶民に金が落ちるだろうという噂が江戸市中に流れているという。復興公共工事による好況が期待されている。

江戸町奉行所の史料では、水害後に隅田川および本所・深川の水路の浚渫が評議されていることがわかるだけで、実際にどのような事業が行われたかが不明であった。この書状は、実際にどのような工事が行われようとしているのかが判明する貴重な史料である。さらに、この工事計画が人々にどのように受け止められているかという大災害後の住民意識を探る手がかりにもなる。

南関東地域は江戸時代以来、一九四七年のカスリーン台風まで約三十年に一度の頻度で大きな洪水に見舞われてきた。その対策としては地下に巨大な放水路（首都圏外郭放水路）が建設されている。水の逃げ場をあらかじめ作っておくという発想自体は江戸時代にもあったのである。